

近代日本における「青年期」概念の成立

——「立志の青年」から「学生青年」へ——

和 崎 光太郎

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿では、近代日本における「青年期」概念の成立過程を探究するとともに、「青年期」を語る文脈での「青年」が従来の「青年」とどのように異なっていたのか明らかにした。史料は、日本で最初に「青年期」について本格的に説かれた教育雑誌『児童研究』を用いた。

結論は以下の通りである。1900年に松本孝次郎が著した社説と、1902年に高島平三郎が著した研究論文によって、近代日本における「青年期」概念が成立した。そこでの「青年」は、新世代としての位置づけが消失すると同時に政治的位置づけが消失し、さらに「青年期」という特別な発達段階に位置づけられることによって、学校に順応すべく対処すべき存在として語られた。

はじめに

青年とは、1880年代に誕生した近代の概念である。ただし、その象徴的イメージは一定ではない。明治大正期に限定しても、時代によって大きく3種に分けられる。第一に、自由民権運動衰退期である1890年前後の、新時代の建設者としての野心的「青年」¹⁾。次は、エリート階層の男子が中等教育へ進むことが当然視されるようになった、1890年代末から1900年代の「学生青年」²⁾。最後は、日露戦争後に創立のピークを迎えた青年団³⁾の主体としての「田舎青年」⁴⁾である。

注目すべきは、世紀転換期における「学生青年」の登場が、前時代の野心的な「青年」のゆるやかな喪失とともに進行したことである。このことは、日露戦争後に「田舎青年」が登場しても前時代からの「学生青年」が依然として存在し続けたこととは対照的である。すなわち、近代日本において「青年」が、第一義的に新時代の建設者として語られた期間は非常に短く、「青年」における革新性の喪失は、のちに「青年」が体制側に取り込まれてゆく必要条件の一つとなったと考えられる。

では、その喪失過程はいかなるものであったの

だろうか。この問題に正面から取り組んだ研究は管見の範囲ではまだ存在しない。「学生青年」を考察対象とした林雅代、北村三子による研究⁵⁾があるが、これらは1890年代末からの野心的「青年」の喪失過程や「学生青年」の構築過程を問うてはいない。また、心理学史では、本格的な「青年期」研究の開始がG. S. ホール著『青年期』が翻訳出版された1910年以降であったと指摘されるも⁶⁾、それ以前の「青年期」概念の成立過程やそれを基盤とした「学生青年」までは考察対象が及んでいない。つまり既往の研究では、「明治後期のこの時期、現在私たちがイメージする青年期概念が、全世代との葛藤を繰り返しながら次第に明確になっていったことは確かである」⁷⁾という指摘が繰り返されつつも、その過程にまで踏み込んだ考察はなされてこなかった。

そこで本稿では、「学生青年」がどのように登場したのか明らかにすることを狙いとして、まずは「学生青年」と密接に関係する「青年期」概念の成立過程を問いたい。具体的には、「青年」(young man)と「青年期」(adolescence)の違いに注目しつつ、近代日本における「青年期」概念の成立の時を特定し、「青年期」がどのようなものとして定義され、誰を対象として語られ、現実

をどこまで説明し得ていたのか探究する。その結果、「青年期」を語る文脈において「青年」へのまなざしには従来とどのような違いがあったのか、明らかになるだろう。つまり、本稿の課題は「青年期」概念の歴史性・社会性を検討することであり、この検討を通じて「学生青年」成立の一つの側面を明らかにすることを目的としている⁸⁾。

まず第一章では、新時代の建設者として説かれた明治中期の「青年」がいかなる存在であったのか概観した上で、「青年期」の初出とそこでの意味を確認する。次いで第二章で、日本で最初に「青年期」の受容を進めた雑誌『児童研究』に着目し、そこで「青年期」がどのように問題化されたのか検討した上で、第三章で「青年期」概念の成立とその概念の内実を明らかにする。最後に第四章で、「青年期」が成立した背景について考察する。以上の作業によって、「青年期」の成立時期と意味内容が特定され、そこで語られた「青年」がどのように前時代の「青年」と異なった存在であったのかが明らかになるだろう。なお、「青年期」概念が内包する男性性と女性性の問題は、独立して扱うべき重要なテーマであるので別の機会を俟ちたい。

1、「青年期」という用語の登場

1-1、「立志の青年」

「青年」という用語が今日的な意味で用いられ始めるのは、東京キリスト教青年会（1880年創設の日本で最初のYMCA）の初代会長小崎弘通（1856-1938）がyoung manを「青年」と訳してからとされる。ただし、メディアで本格的に「青年」が説かれ始めるのは、自由民権運動が衰退に向かっていた1880年代後半である。

明治20年代（1887-96年）を代表するジャーナリスト徳富蘇峰（1863-1957）は、1887年に、国家の要職を牛耳っている薩長藩閥を「天保ノ老人」と批判し、これからは「明治ノ青年」が新しい「社会運動」を起こし「天保ノ老人ヲ導」き「新日本」を建設することを訴えている⁹⁾。ここでの「社会運動」とは、政治革命であった明治維新に次ぐ思想革命としての「第二之維新」であり、

その先導者として「明治ノ青年」を「天保ノ老人」と対置し、鼓吹したのである。また、1890年代に東京キリスト教青年会講師として神田の青年会館で雄弁をふるい、青年から絶大な支持を得る松村介石（1859-1939）は、1889年の時点で、「嗚呼世に青年ほど畏るべきものはあらじ。何となれば彼等は猶ほ龍の如し如何に変化するや知るべからず」と「青年」を讃え、「自由の意志の発達に任せて或はミルトンとなり或はリンコルンとなり、或は留侯となり、或は太閤となり」と、時代の先導者として青年を奮い立たせた。松村は、「青年」を「人生の首途」と呼び、「諸君よ之を知れ国家は現在の役者を頼まずして而して諸君を頼むことを」と説き、新たな時代の「国権」の振興と「自由」の伸張を訴えた¹⁰⁾。ともに青年の先導者として1880年代後半から1890年代にかけて名を馳せた蘇峰と松村は、民権運動が衰退に向かいつつあった当時の若者のあり方に危機感を抱き、新たな時代の建設者として彼らを「青年」と呼んで鼓舞したのである。

1890年代後半には、「少年」「青年」を自称する者が都市部以外にも少数ながら誕生する。中でも、後に青年団運動のリーダーとなる山本滝之助（1873-1931）が1896年に故郷（現広島県福山市沼隅町）で『田舎青年』を自費出版していることは、象徴的である¹¹⁾。すなわち、1880年代末に言説先行で成立した「青年」とは、新しい時代の建設者として立志すべき存在であり、そこで誕生した「青年」を自称する者たちによって一種の社会的ステータス（時代の先導者）として確立された。本稿ではこのような「青年」を、「青年期」概念成立以前の存在として「立志の青年」と呼ぶことにする。

1-2、「青年期」の初出

では、「青年期」はいつ頃から説かれ始めるのだろうか。その初出は特定できていないが、1896年に以下の2つの用例がある。一つ目は、雑誌『教育時論』に掲載された懸賞論文である。「日本人不健康の原因を論ず」と題されたこの論文は、タイトルの通り生理学の論文であるが、そこでは「胎児期」「嬰兒期」「幼児期」「小児期」「青年期」

「壮年期」「老衰期」という発達段階別に議論が展開され、「青年期」が以下のように説明されている。

人間コノ時機ニ達スル時ハ、体力ノ増大スルト共ニ、知情ノ活動激烈トナル。一躍シテ聖賢ノ跡ヲ追フモ、墮落シテ罪惡ノ淵ニ沈ムモ、皆運命ヲコノ期ニ決ス。故ニ人生ノ危機ト称ス。今特ニ其身体ニ於ケルノ現相ヲ詳言スレバ、男子ニアリテハ、鬚生ヘ、肩怒リ、筋肉、四肢、俄カニ成長シ、女子ハ、胴部俄カニ発達シ、且ツ月経ヲ来ス。遺伝ノ症状アルモノハ、コノ期ニ於テ多ク発生シ、精神病ハ頻リニ其虚ヲ窺ヘリ¹²⁾。

「青年期」が心身の発達段階の一つとして位置づけられ、身体の変化として第二次性徴が挙げられている。ここでは後に「青年期」が語られる際のキーワードである「人生ノ危機」が使用されているが、その意味するところは「将来の運命を左右する時期」であり、青年そのものが危機にさらされているという意味ではない。

もう一つの用例は、高島平三郎（1865-1946）¹³⁾が『教育時論』で連載していた「続心理漫筆」に見られる。そこでは「諸説を折衷し、自己の考案を加へ」た結果、「嬰兒期」「乳歯期」「少年期」「青年期」という発達段階が設定され、「青年期」を16歳から21歳としてその特徴が語られている¹⁴⁾。ただし、そこで語られている「青年期」の特徴は、知情意すべてにおいて「少年期」よりも大人に近づいたという程度のものであり、「青年期」が特にクローズアップされているわけではない。総じて言えば、「青年期」「人生の危機」という用語は1896年には確認できるものの、そこでの「青年期」は単なる心理的・生理的発達段階の一つ¹⁵⁾、「人生の危機」は将来を左右する時期という程度の意味であり、まだ「青年期」自体が問題であるという眼差しではなかった。むしろ、大人への準備段階を意味するという点では、「立志の青年」論でしばしば語られた、可塑的であるからこそ道を踏み外さず修養に勤しむべき「青年時代」「修養時代」に近かったと言える¹⁶⁾。

2. 雑誌『児童研究』における「青年期」の問題化

2-1. 青年を研究（観察）対象とする眼差し

「青年期」が本格的に論じられるためには、本格的な児童研究雑誌の創刊を待たねばならなかった。高島平三郎を実質的なリーダーとして発行された、雑誌『児童研究』¹⁷⁾である。

『児童研究』は、欧米心理学の強い影響力のもとで1898年に創刊された。この雑誌の新しさは、児童を教育するためには児童のことを科学的に知らねばならないという立場から¹⁸⁾、心理学・生理学などを駆使して、児童とはいかなる存在なのかを探究するところにあった。すなわち、当時すでに『教育時論』『教育公報』などの教育雑誌が刊行されていたが、そこでの主たる議論は教育政策・教育方針、または教員の質・量をめぐる問題についてであり、『児童研究』のように児童を研究対象とする視点はそこでは希薄であった。また、『児童研究』における「研究」とは生理学・心理学などの科学によるお墨付きが与えられた現場レベルでの実践も含む。つまり、『児童研究』は今日まで通じる「研究対象としての児童」という認識枠組みに基づいた、当時としては画期的な雑誌であった。このような特質を有する雑誌において、日本で初めて「青年期」が主題として論じられ¹⁹⁾、問題化されたことは、偶然ではない。ゆえに本章では、雑誌『児童研究』を史料として、「青年期」が問題化されるに至った経緯を明らかにしたい。

本論に入る前に、議論に必要な範囲での基本的な書誌説明をしておく。誌面構成は、社説にあたる「論説」欄と、論文や講演筆記を掲載する「研究」欄が中心となっている。誌面の改訂は、明治期に二回、日本児童研究会（会長元良勇次郎）の機関誌となった1902年7月と、同会の組織が改革された1907年7月に行われた²⁰⁾。主な執筆者は、高島と、帝国大学で元良勇次郎の門下生として心理学を研究した松本孝次郎（1869-1932、後の東京高等師範学校教授）・塚原政次（1872-1946、後の広島高等師範学校教授）の三人が中心となった。想定された読者には、研究者のみならず、教

師及び上流階級の母親も含まれていた²¹⁾。

『児童研究』では、創刊当時から「青年」に関する記事が確認できる。「研究法」欄に掲載された無記名の記事では、「青年時代に読まるゝ書物その他雑誌の表を作るべし」、「愛読する所の書物及び雑誌の名を挙げしめ、且つその愛読する理由を問ふべし」²²⁾ など、質問紙法（後述）においてどのような質問をすべきかが列挙されている。「雑録」欄に掲載された無記名の記事では、「試に中学校師範学校等の学生及び之と年齢を等しくせる青年に就きて、彼れ等が理想とせる所を問ひ試みるべし」と、まず青年の理想がどのようなものなのか観察することから出発しようとする。ただしその狙いは、「青年は国家の生命なり、元気なり、青年にして理想とする所卑近ならば、国家の前途や知るべきのみ、教育の任に当るもの警醒して可なり」²³⁾ と説かれており、記事タイトルにある「青年の理想」は最初から決定されている。つまり、「青年」を研究（観察）対象とする眼差しは、あるべき「青年」からの逸脱度合いを測定するための現状認識の手段にすぎなかった。また、ここでのあるべき「青年」とは「国家の前途」を担う存在であり、理想とされているのは従来と変わらず「立志の青年」であった。

ただし、これらの記事はあくまで「青年」について語られているだけで、「青年期」概念は用いられていない。誌上における「青年期」の初出は、「研究」欄に掲載された高島平三郎の「少年期に於ける倫理的感情の研究」と題する論文である。そこでは以下のように述べられている。

中等以上の教育に就きては、深く注意するもの少く、随ひて之が研究を企つるものもあらざる態状なりき。されば、各地の師範学校中学校に於ける徳育の景況は、往々其の宜きを失し、学校騒動、校長排斥等の厭ふべき現象、続々世に現はるゝに至れり²⁴⁾。

つまり、中等教育研究が不十分なので徳育がうまく機能しておらず、「学校騒動」や「校長排斥」が惹き起こされると言うのである。ただしこの部分は、「少年期」（＝小学生）について語った後の付け足しであり、「青年期」という用語も引用部分のあとに「少年青年期」と用いられているだけ

である。少なくともこれをもって本格的に「青年期」が論じられたとは言えず、「青年」を論じる際に心理学の手法を用いただけの、過渡的なものであった。

2-2、「青年期」の問題化

誌上で「青年期」が初めて定義されたのは、1899年8月に「研究法」欄に連載された無記名「研究法大意」においてである。

児童心理学者の説く所によれば男児及び女児が青年期に近づくに従ひ心的作用の類同は漸く減少し男児は活発となり知力を主とし義務を重んずるに至り、女児は感情的傾向を有し自己を保護するの本能作用多く働き他人の賞讃と尊敬とを得んことを求むるの念深しと言へり。而して遺伝的性質の大部分も亦この時代に於て著るしくあらはるゝもの多し。神経に関する疾病及び脳髄に関する病患も亦この時代に起るもの多しとす²⁵⁾。

ここでは「青年期」の特徴が、男児と女児の心理的差異化、遺伝的性質の発現、神経症・脳病の発症、の3点にまとめられている。続いて、青年の現状が以下のように述べられている。

かゝる青年時代のものにありては往々両親、監督者、教師等によりて到底教育し難きことを訴へらるゝものあり。かゝる青年は朝は容易に寢床を離れず又何等の作業をもなさず、時としては破壊的動作をなし書籍を破り家具を毀損し他人を強迫し金銭を所持せざるも無用の物品を購買して両親或は監督者の迷惑を来し且つ詐偽を構成することあり。（同前）

ここでは、無気力、破壊的動作、金銭絡みの悪行が「青年時代」（＝「青年期」）の問題として語られている。しかし、これらの行為と「青年期」の特徴との関連は説明されていない。また、「青年」が「両親、監督者、教師等」によって教育される存在とされており、誰しもが経験する「青年期」を論じながらもその対象は明らかにエリート青年²⁶⁾に限定されている。このことは、問題行動の対策が以下のように述べられていることからわかる。

かゝる者（前の引用部分にある「かゝる青

年」―引用者）に向かつては病理学者が示す所の原則に基づきて取扱はざるを得ず。通常取る所の厳格なる処置及び種々の責罰は實際その効を奏すること少なく而かも屢々有害なることあり。かゝる者は一時学校より退かしめ親切にして且つ確實なる伴侶と共に一時静かなる地方へ退隠せしめ若し必要あらば医師の監督に附することを以て適当なる処置なりとす。かくして新鮮なる空気の中に於て多くの運動をなさしめ又興奮的ならざる滋養物を与ふべきなり。（同前）

対処方法が、教師・家庭ではなく病理学に求められている上に、教師の厳格な対応はむしろマイナスであると指摘する²⁷⁾。この指摘は、当時他の教育雑誌がもっぱら学校と家庭との連携を謳っていた²⁸⁾ことを考えれば、かなり異色であると言える。また、ここでは「青年」の問題行動が「青年期」特有の現象とされている。従来は「青年期」が一つの発達段階として論じられているにすぎなかったのが、ここで始めて「青年期」が問題化されて語られた。すなわち、「立志の青年」論で問題にされていたのは今日で言う「青年」の心構えであったが、ここでは「青年期」の心そのものが問題化されているのである。以後、このような「青年期」を問題視する立場からの論考が定期的に誌上に掲載される。その嚆矢が実態に基づいた記事や論文ではなく、欧米の研究法を紹介する「研究法」欄の論考であったことは、記憶にとどめておくべきだろう。

本章の内容をまとめておこう。創刊当時の『児童研究』誌上での「青年」は、科学的な研究（観察）対象とされた中学校及び師範学校の男子生徒であり、それは「青年期」の特徴が論じられる際にも変化がなかった。つまり、誰しもが経験する生理的・心理的発達段階としての「青年期」を論じつつ、結局は「立志の青年」論と同様に、エリート階層の「青年」のみを対象としていたのである。また、最初に「青年期」の特徴が論じられた論考は、現状に基づいた記事や論文ではなく、欧米の研究法を紹介する「研究法」欄掲載の記事であった。そこでは、青年の問題行動が「青年期」の心理的・生理的な特徴と結びつけて語られ

るが、その因果関係が不明確であり、現状をうまく説明したものとは言い難い内容であった。「立志の青年」論のように「青年は～であるべき」とストレートに謳われず、「青年とは～であるから……ように対処すべき」と論じるのは新しい視点であるが、理論が先行し現実と結び付いていなかったのである。

3、「青年期」概念の成立

3-1、「人生の危機（危機）」

創刊から一年が経過すると、主題として「青年」を扱う論考が掲載されるようになる。たとえば、「適用」欄に「青年時代」と題する以下のような論考がある。

青年時代の特徴は一般に感情的にして熱中し易きにあり。而して個人的方面及び人格に関する意識は漸く青年の時代に於て十分に発達し、従来の生活せる領域よりは、更に一層拡大なる限界に於て生活することゝなるものなり。是に於てか青年は実に人生の危機に到達せるものにして、人生の悲劇的時代に遭遇せるものと言ふも可ならむ²⁹⁾。

「青年時代」が、感情の変化と自己意識の拡大がもたらす「人生の危機」「人生の悲劇的時代」として問題化され、「青年」をいかに指導するかという視点から語られる。しかし、この文章からは「危機」と「悲劇的時代」が具体的にどのような状況なのかわからない。

この記事が掲載された三ヵ月後に、同じ「適用」欄に「高等学校時代」と題する論考が発表される。

発達の段階中、大に吾人の注意を要するのは高等学校時代にありとす。何となれば、この時代に於て驚くべき変化の起ること多く、生活中最も危機多き時期なりとす。……青年をして自ら研究の方面を選択せしめ、勉学してその効果の不十分なるのは、屢々退学するの止むを得ざるに陥るもの少なからず。而かも或は青年をして直ちに自治的生活をなさしめんとするものあり³⁰⁾。

高等学校時代が「生活中最も危機多き時期」とさ

れ、さらにその理由が「驚くべき変化」に求められている。「変化」が何から何への変化なのかは、この論考中では説明されていないが、前掲の論考「青年時代」の引用部にある、感情的になる・個人の意識が強化される・生活圏が拡大する、という意味であろう。つまり、ここでの「危機」とはこれまで本稿で見たような将来の運命を左右する「危機」ではなく、内的変化と生活環境の変化がもたらす「危機」、すなわち「青年」そのものが「危機」であるという意味で使用されている。では、論者はどのような狙いでこのような「危機」を論じたのか。

吾人は既に高等学校に入るべき青年は人生の危機に到達せるものなるを認むると同時に、教師は彼の良友となりて大に誘掖指導するの必要あるを感じ、研究上学科の選択を要する場合に於ては、教師は平生自己の観察の結果に徴して多少の助言を与ふるの好意を有せざるべからず。吾人の見る所によれば現在はこの危機に立てる青年を誘掖指導するの点に於て欠く所多きを認む。(同前)

「人生の危機」に到達した「青年」に対する指導は、「彼の良友となりて大に誘掖指導」することがベストであり、そのためにはその「青年」を「監察」し理解しておかねばならない。つまり、「高等学校時代」が「人生の危機」であるということが、創刊当初から繰り返し説かれてきた青年指導法の理論的根拠とされているのであり、観察結果として「青年期」が「人生の危機」であると導き出されたわけではない。

また、「高等学校時代」が「危機」だといきなり説かれても、当時の人々には理解し難かったのではなかろうか。前掲の論考「青年時代」のように、その説明が全くなされていない場合はなおさらである。「人生の危機」の用語としての起原は不明であるが、このような唐突な使われ方をされていることから、言説先行で誕生した訳語であったと考えられる。もとは「将来を左右する重要な時期」という意味だったその訳語に、「青年期そのものが危機である」という意味が付け加えられたのだろう。

3-2、「青年期」概念の成立

1900年5月、松本孝次郎は「人生の危期」と題する社説を著した。

児童の学校生活は……児童の運命に影響せざる時機なきを発見するを得べし。即ち或る意味に於いては児童は常に人生の危期を経過しつつあり……常に運命の危機を経過しつつ進むものなりとす。……吾人が今茲に論究せんと欲する所の問題は…学校生活期に於ける最も危殆なる時期を指すなり。……幼年期少年期青年期壮年期成熟期老年期等の段階は吾人の生活に於て明かに区別せらるゝなり。而して吾人が所謂学校生活期に於ける最も危殆なる時期は男女を通じて其の青年期にありとす³¹⁾。

ここでの「人生の危期」とは、将来に影響を与える「運命の危機」であると同時に、「学校生活」における「危殆」であり、従来の二つの意味どちらもが込められている。そして、「学校生活期に於ける最も危殆なる時期」は「青年期」とされ、「青年期」こそが「人生の危期」であるのは以下のような「科学的基礎」によるとする。

脳の重さ…男子は14歳、女子は12歳で一時的に脳の重量が低下し、「生活上急劇の変動を起す」。重量低下の理由は、「血液の多量は内臓及び他の機官を養成するに用いらるゝが為め」。

声がわり…女子は「児童期の特性を保持する」。第二性徴に関しては声がわりしか言及されていない。

精神の活動…男女それぞれの「性質」の変化（男子は知、女子は情が発達）が、「精神活動」の変化を誘発。

遺伝の顕在化…「遺伝的性質の大部分」が顕れ、そこには「遺伝的欠損」も含まれる。

脳病・精神病…「青年期の終わりに近き時期」に始めて発症。

最後に、これらの「科学的基礎」をまとめて、「青年期は一方よりれば活気を十分に育成する所の時期にして、同時に身心の急劇なる変動ありて為めに頗る危険なる時期なり」³²⁾としている。ここから読み取れる「青年期」の特徴は、今まで誌上で

語られてきたもののまとめであり、それらが体系化されたことで、心身の変化が「青年期」を「人生の危期（危機）」たらしめるという図式が成立したと言えるだろう。

ただし、ここでの「人生の危機」には、「懷疑」「煩悶」といった日露戦争期以降に「青年」を語る際のキーワードが含まれていない。つまり、「青年」自体が危機であるというその「危機」の内実が、学校制度からの脱落としてしか語られていないのである。「人生の危機」を「懷疑」「煩悶」と関連させたのは、高島平三郎が1902年に著した、「青年期」を主題とした日本で最初の論考「青年期及び其の教育」³³⁾であった。

「青年期ほど神秘的なるはあらじ」と説く高島の立場は、かつて「青年ほど畏るべきものはあらじ」と説いた松村とは明確に異なる。高島においては、「青年」が人知では測り知れない存在として認識されるが、同時にそれは客観的な観察対象でもあり、そこに「畏れ」はない。この論考は全部で11の章からなり、各章で「青年期」の特徴を述べ、それに対して教師がいかに対応すべきか説明している。最終章「教育上の注意」はこの論考のまとめとなっており、以下の4項目、すなわち「厳格主義の弊」、「理想」（「健全なる理想を与ふ」）、「体育」（「青年期に於ける不健全の欲望及び懷疑心感情等は、何れも、身体の影響に基かざるはなし」）、「指導者」（「青年を教育する者の如きは、最も深く意を用ゐて、青年に関するあらゆる知識を収集せざる可らず」）で構成されていることから、従来の誌上で主張と軌を一にしていることがわかる。「青年期」の特徴についても、ほとんどがこれまで誌上で論じられてきたことのまとめである。

唯一の新しさは、「人生の危期」が明確に「懷疑の時代」とされ、その懷疑が「自棄」「煩悶」「自殺」をもたらすとされた点にある。世間で「青年」の「煩悶」「自殺」が論じられるようになるのは一年後の藤村操の自殺（後述）をきっかけとするので、この論考は「煩悶青年」の出現に先行していた。また、高島は「青年」の到達目標を「新国民」と明言しているが、そこには「立志の青年」論にあったような時代変革の期待は微塵も

読み取ることが出来ない。つまり、高島にとっての「青年期」とは「人生の首途」（松村）ではなく「人生の危期」であり、「青年」は第一義的に病める存在として語られたのである。

1903年5月22日、第一高等学校の学生である藤村操が、華嚴の滝にて投身自殺する。将来を約束されたエリート青年が、人生への懷疑を綴った遺書「巖頭之感」を残して自殺したことは、マスコミの注目を集めた³⁴⁾。しかし『児童研究』における藤村自殺への反応は極端に乏しく、2点のみであった。一つは、藤村の自殺は従来から誌上で訴えてきた「青年期」研究の必要性を知らしめる機会であるとする社説³⁵⁾。もう一つは、青年における厭世的傾向の原因を「生理的事情」（「神経性の素因」）に求めたものである³⁶⁾。つまり、いち早く「人生の危期」としての「青年期」に注目していた『児童研究』は、他の雑誌や新聞と異なり、今まで説いてきた「青年」論の枠組みで藤村自殺の説明が可能だった。ゆえに、藤村自殺に際しても特別な反応を示す必要がなく、以後も誌上で「青年期」が論じられはしたが、そこで「青年期」概念が問い直されることはなかった³⁷⁾。

本章を小括しておこう。「青年期」とは、男女の差異化、遺伝的性質の発現、神経症・脳病の発症という内的変化が生じる発達段階であり、それゆえに将来を左右するだけでなく青年自身が危機を迎える「人生の危期」とされた。青年が心理的に不安定である根拠が、「立志の青年」論のような「未熟だから」という論理ではなく、生理的变化に基づく精神の変化として説明されたのである。これらの内容を体系化したのは松本・高島であり、松本によって「心身の変化が青年期を人生の危期（危機）たらしめる」という図式が成立し、高島によって「青年期」「人生の危期」が「自殺」「煩悶」をもたらす「懷疑の時代」とされた。この段階をもって、「青年期」概念が成立したと言えるだろう。そこでの「青年」へのまなざしは、「立志の青年」論とは異なり、「青年」を期待ではなく対処すべき存在として捉えていたのである。

4. 「青年期」が成立した背景

では、「青年」を論じるにあたって政治的アジテーターが退却し、かわって心理学者たちが登場したのは、いかなる歴史的背景があったのだろうか。

1890年代の青年について、E. H. キンモンスは、「青年の政治熱は、国会が開設されると急激に冷めていった。理想主義者は落胆し、出世主義者は富貴のための学問に復帰した」³⁸⁾と総括している。1890年代の学生を学問への「復帰」とすることに筆者は同意しないが、この時期の「青年」にキンモンスの言う2パターンの価値観が存在したことは確かだろう。ここで問題にしたいのは、そのどちらもが脱政治的な自己形成を志向していることである。たとえばすでに別稿で述べたように、この時期に青年の自己形成概念として誕生した〈修養〉とは、「形式的徳育」の代替として将来の「国民」（「臣民」）をより機能的に形成する駆動装置であり³⁹⁾、それが世紀転換期には、「真の教育」を意味する「殺し文句」として説かれた⁴⁰⁾。このような脱政治的な自己形成概念である〈修養〉の流行が示すように、政治的な主体形成はすでに時代遅れとなり、ここに政治的アジテーターたちは二分された。すなわち、「人格」や〈修養〉へと青年論の内容を転換し「青年」から支持され続けるか、もしくはアジテーターとしてとどまり「青年」の支持を失うか、である。前者の代表としては最初の「修養書」⁴¹⁾の執筆者である松村介石、後者の代表としては徳富蘇峰があげられるだろう。

では、心理学者たちが「青年期」を説き始めたのは、いかなる背景があったのだろうか。先に見た高島の論文で、「青年期の研究の如きは、殆んど未開の荒野たり」⁴²⁾と嘆かれているように、松本・高島にとって「青年期」の問題は自らが開拓していったテーマであった。しかもそれは、1890年代末のまさに「市井の人々に対して心理学者が働きかけるようにな」⁴³⁾った時に、進められたのである。彼等の「青年期」研究は、何を動機としていたのだろうか。

第一に、海外からの影響があげられる。具体的

には、1890年代末から本格的に青年期研究に着手していたG. S. ホールの影響である。そもそも、日本における児童研究の始まり自体が、ホールの影響によるところが大きかった。その跡は以下のようなものが確認できる。まず、反復説⁴⁴⁾。『児童研究』では、児童と「野蛮人」における類似点の指摘が繰り返されている⁴⁵⁾。次に、質問紙法⁴⁶⁾。『児童研究』創刊から4年以内に、青年研究に関する質問紙法の記事が計6回掲載されている。最後に、欧米における「青年期」研究の紹介⁴⁷⁾。明治期の学術書が往々にして輸入学問であった例に漏れず、『児童研究』も欧米学問の輸入にかなりの誌面を割いていた。このように、リアルタイムで欧米の心理学研究の動向が日本にもたらされていたのであり、いまだ日本の心理学研究の「自立」が達成できていない時代であったからこそ⁴⁸⁾、いち早く1890年代末から「青年期」研究へと目が向けられたのである。

次に指摘できるのは、いわゆる学生風紀問題である。日清戦争（1894-95）後には、教育雑誌においてしばしば「学生の気風」が「虚弱」になりつつあることが問題とされたが⁴⁹⁾、1898年になるとそれにかわって「学生風紀」の「廃頹（頹廢、頹敗）」が問題とされ、その原因や改善策が論じられるようになった。このいわゆる学生風紀問題は、一種の中学生・女学生・師範学校生バッシングであり、実体として風紀の乱れがあったかどうかは疑問であるが、当時の新聞には様々な「風紀の乱れ」が見世物的に載せられ、教育雑誌にはこの「問題」について様々な見解が寄せられた⁵⁰⁾。『児童研究』でも1900年4月の「論説」で「青年学生の腐敗墮落」が論じられ⁵¹⁾、それ以降に本格的な「青年」論が登場している。前掲の無記名「人生の危期」では、「過般未成年者喫煙防止法發布せられ、加ふるに青年学生の風紀次第に振肅せられん」とある。つまり、『児童研究』誌上では創刊から「青年」が注目されていたが、本格的に論じられるきっかけとなったのは学生風紀問題であった。また、同時に学校騒動⁵²⁾も、「青年期」特有の問題として語られるようになる。「学校騒動の原因を論ず」と題する社説では、「青年期を学校生活の為に費す者増加するに従ひ、所謂学

校騒動なる声を聞くことも亦頻繁となれり」と述べた上で、「(騒動の原因は一引用者) 教育者が青年そのものゝ性質を熟知せざるがために、其の取扱を誤り、ために相互の間に衝突を来たすにあり」⁵³⁾と、注意を喚起している。ここに言う「青年そのものゝ性質」とは、同誌上で形成された、内在的に病的問題を抱える「青年」の特質であった。「青年」へのこのようなまなざしは、教師のあるべき姿が「師道」論から教師〈修養〉論へと変化したという歴史的背景によって支えられていた⁵⁴⁾。

最後に、いわゆる「学校病」が認知されつつあったことが挙げられる。1880年代末から学生の脳病・神経病が問題化されており⁵⁵⁾、『児童研究』では高島平三郎前掲「青年期及び其の教育」の約1年前に学生の神経衰弱及び自殺が採り上げられ⁵⁶⁾、投書には「此の頃、中学又は師範学校時代の男女学生に、神経衰弱症がよほど多いやうである。ことに、高等学校入学の際には、学生の中に、此の病が多い。何とか注意せねば、未来の国民を如何せん」とある⁵⁷⁾。

要するに、海外の影響はそもそも『児童研究』の創刊自体がその影響下にあったことを考えれば当然のことであるが、それだけではなく、学生風紀問題や「学校病」の登場といった青年をめぐる新たな問題の立ち上がりが「青年期」研究を促したと言えるだろう。

おわりに

「青年期」という用語は、1890年代後半から散見され、1898年創刊の雑誌『児童研究』において本格的に使用されるようになった。その中で次第に「青年期」とは何であるのかが定義されるようになり、1900年に松本孝次郎が著した社説と1902年に高島平三郎が著した研究論文によって体系化された。

「青年期」は、辞書的にはすべての青年が通過する発達段階を意味するが、実際論じられる際には、もっぱらエリート青年である中学生・師範学校生・高校生が対象とされた。そこで「青年」に向けられたのは、「立志の青年」論のような「青年とは〜であるべき」という未来の建設者への眼

差しではない。「青年とは〜であるので適切な対処をすべき」という、脱政治化・脱社会化された心理的・生理的な存在として「青年」を把握する眼差しであった。このように、「青年期」概念の成立は新たな「青年」像の誕生を伴っていたが、それは欧米の児童研究に影響を受けつつも、学生風紀問題や「学校病」といった青年をめぐる「学生」としての問題の立ち上がりに誘発されていたのである。つまり、「青年期」を生きる存在として語られた「青年」は、学校に順応するよう対処すべき存在として特別な発達段階に位置づけられると同時に、将来の政治的・社会的可能性に満ちた存在としての姿を失っていったのである。

本稿では、明治後期の「青年期」概念の成立に焦点を絞って考察を進めたが、「青年期」がいつ・どのように他の雑誌及び著作にまで拡大するのか、歴史的に検証することはできなかった。また、「青年期」概念の特徴の一つである性の差異化については、ジェンダーの視点からあらためて考察する必要がある。これらの残された課題については、別稿を期したい。

注

- 1) この「青年」の生成過程については、木村直恵による詳細な研究がある(木村直恵『〈青年〉の誕生』新曜社、1998年、131-300頁)。なお、本稿では実態としての青年と区別するために、言説上での青年を「青年」と表記する。後述の「青年期」も同様。
- 2) 林雅代は、「学校生徒」の規範が青少年全体へと適用されてゆく事例として、未成年者喫煙防止法の生成・展開過程を明らかにしている(林雅代「近代日本の「青少年」に関する一考察」教育社会学会編『教育社会科学研究』第56集、1995年)。
- 3) 多仁照廣『青年の世紀』(同成社、2003年)56頁。
- 4) 加藤千香子は、日露戦争後の「青年」が政治的意図の下に作り出され、その概念に基づいた主体形成がマスキュリティと表裏一体であったことを指摘している(加藤千香子「日露戦後における「青年」の主体的構築」歴史科学協議会編『歴史評論』698号、2008年)。
- 5) 林雅代前掲「近代日本の「青少年」に関する一考察」、北村三子『青年と近代』(世織書房、1998年)3-10頁、49頁、111-147頁。なお、かつて田嶋一が、「青年でありたいと願い、青年期を求めて共同体から都市社会への脱出を試みて、成功したり成功しなかったりするものたちの一群」(田嶋一「共同体の解体と〈青年〉の出現」同編

- 集委員会編『叢書〈産む・育てる・教える——匿名の教育史〉1〈教育〉——誕生と終焉』（藤原書店、1990年、42頁）とまとめた、いわば「学生青年」を目指した立身出世主義志向の若者たちについては、竹内洋による一連の研究がある（竹内洋『立身出世主義 増補版』世界思想社、2005年、など）。
- 6) 津留宏「わが国における青年心理学の発展」青年心理学研究会代表依田新編『わが国における青年心理学の発展』（金子書房、1973年）5-6頁。近年、いわば「心理学の社会史」（鈴木祐子ほか『日本の心理学史研究の現状と意義』心理学評論刊行会編『心理学評論』第38巻第3号、1995年）とも言える分野が開拓されつつあるが、対象が戦中・戦後に集中している。
 - 7) 加藤潤「近代言説としての「青年期」」名古屋女子大学編『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』（第48号、2002年）。なお、この加藤論文の主眼は、後期近代におけるエリクソンの「青年期」概念の希薄化を指摘することにある。
 - 8) ここに言う「青年期」概念の歴史性・社会性の検討とは、「青年期」が語られたことの歴史的・社会的意味を問うということであり、実態として「青年期」が出現しそれが学説としてまとまった過程を考察するのではない。よって本稿では、学説的分析は必要な範囲において言及するにとどめる。
 - 9) 徳富蘇峰『新日本之青年』（『明治文学全集 34 徳富蘇峰集』筑摩書房、1974年、初出は1887年）118-122頁。
 - 10) 松村介石『立志之礎』（警醒社、1889年）1-17頁。
 - 11) 山本滝之助が「青年」を名乗ったことの背景および歴史的意味については、田嶋一「〈青年〉の社会史——山本滝之助の場合」前掲『叢書〈産む・育てる・教える——匿名の教育史〉1〈教育〉——誕生と終焉』（132-160頁）を参照されたい。
 - 12) 山口鉞三郎「日本人不健康ノ原因ヲ論ズ（承前）」『教育時論』（第397号、1896年4月）。
 - 13) 高島は、学習院助教授だった1890年、アメリカ留学中にG. S. ホールのもとで学んだ篠田利英（後に高等師範学校教授、女子高等師範学校教授）を通じて質問紙法を知り、帝国大学教授元良勇次郎主催の研究会を通じて本格的な児童研究に着手していた。
 - 14) 高島平三郎「続心理漫筆」『教育時論』（第406号、1896年7月）。
 - 15) このような「青年期」の用法は、教育学者中島半次郎の論考にも見られる（中島半次郎「中学校の倫理科」『教育時論』第450号、1897年10月）。
 - 16) 当時の「青年時代」「修養時代」という言説の歴史的位置については、和崎光太郎「世紀転換期における〈修養〉の変容」教育史フォーラム・京都編『教育史フォーラム』（第5号、2010年）を参照されたい。
 - 17) 『児童研究』における「児童」とは、小学校就学年齢を中心に、乳児から20代半ばまでを指す。つまり、「青年」は「児童」に含まれていた。この用法は、同時期にアメリカで興隆していた「児童研究」（後述）での用法をそのまま輸入したものである（高島平三郎「児童の情性を論じて我が国民性の欠点に及ぶ」『児童研究』第2巻第2号、1899年10月、塚原政次「児童研究の困難を論ず」『児童研究』同前号）。
 - 18) 誌上では、児童研究を学ばない教師が「恰も敵の状態をも勢力をも知らずして戦争する猪武者」と呼ばれている（「応問」『児童研究』第3巻第7号、1901年1月）。石井房江によれば、このような眼差しは、1890年代初頭から高島によって進められた小児研究から継承されている（石井房江「高島平三郎の小児研究とその時代」心理科学研究会歴史研究部会編『日本心理学史の研究』法政出版、1998年）。小児とはchildの旧訳。
 - 19) 『児童研究』が「初めて」である根拠として、以下の調査を行った。調査対象は、明治期を代表する雑誌として、教育雑誌『教育時論』及び『教育公報』（『大日本教育界雑誌』の後継）、総合雑誌『太陽』、中学生を主たる読者対象とした『中学世界』であり、これらの雑誌における1894年から1900年までのすべての記事を調査した。その結果、「青年期」を主題として論じた記事は一点も発見できなかった。なお、教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（日本図書センター、1992年）に所収されている他の雑誌については、1900年以前のものを目次で確認したが、「青年期」をタイトルにした記事は確認できなかった。
 - 20) 『児童研究』の書誌的分析については、下山寿子「『児童研究』——学校の学びと教育病情報——」菅原亮芳編『受験・進学・学校——近代日本教育雑誌にみる情報の研究』（学文社、2008年、268-287頁）を参照。
 - 21) ただし、少なくとも創刊当初は、実態として母親が購読していたとは考えられない。ゆえに、誌上には以下のような愚痴が散見される。「全国幾多の女子師範及び高等女学を卒業せし者にして、此の位の雑誌が分らぬ理のあるべしや。若し分らぬなら、教育が悪しきなり」（無記名「女子は何故に児童を研究せざるか」『児童研究』第2巻第2号、1899年10月）。
 - 22) 無記名「青年時代の研究」『児童研究』（第1巻第3号、1899年1月）。
 - 23) 無記名「青年の理想に就きて」『児童研究』（第1巻第3号、1899年1月）。
 - 24) 高島平三郎「少年期に於ける倫理的感情の研究」『児童研究』（第1巻第8号、1899年6月）。
 - 25) 無記名「研究法大意（第十回）」『児童研究』（第1巻第10号、1899年8月）。「児童心理学者」が誰なのかは言明されていないが、G. S. ホールを指していると思われる。この記事の半年前に、元良は別の雑誌で以下のように述べている。「児童ほど危険なものは無い、前ホール氏も言はれて居る通り特に十五六歳の時機は、生理上心理上一変するの時である」（元良勇次郎「児童研究のこと」『少年世界』第5巻第5号、1899年2月）。

- 26) 米田俊彦の計算によれば、中学校入学者の同年齢人口比は1893年で2.1%、1903年で6.8%である(米田俊彦『近代日本中学校制度の確立 法制・教育機能・支持基盤の形成』東京大学出版会、1992年、104頁)。
- 27) ただしこのことは、「監督者」としての中学教師という位置づけが揺らぐことを意味しない。学校内では中学教師が生徒を監督すべきであり、そのためには教師が「青年学生一般の生活の程度及び嗜好の傾向」(無記名「中学生徒の監督」『児童研究』第2巻第2号、1899年10月、「適用」欄)を知るべきだという論、教師が「自ら、人格を修養し、真に青年の模範となるべし」(無記名「青年の本領」『児童研究』第2巻第4号、1899年12月、「研究」欄)という論は誌上に掲載され続けている。
- 28) この時期における家庭教育問題の立ち上がりについては、小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房、1991年)65-92頁を参照されたい。
- 29) 無記名「青年時代」『児童研究』(第2巻第4号、1899年12月)。
- 30) 無記名「高等学校時代」『児童研究』(第2巻第7号、1900年3月)。
- 31) 無記名「人生の危期」『児童研究』(第2巻第9号、1900年5月、「論説」欄)。執筆者は松本孝次郎。後に、松本孝次郎『児童研究』(帝国通信講習会、1901年、163-176頁)、松本孝次郎『実際の児童学』(同文館、1901年、208-220頁)所収。これらの著書によれば、この論考は松本がイギリスの生理学者ワーナーの説を主に参照して執筆したことがわかる。
- 32) 無記名前掲「人生の危期」。
- 33) 高島平三郎「青年期及び其の教育」『児童研究』(第5巻第4、5号、1902年6、7月、「研究」欄)。
- 34) 高橋新太郎「『巖頭之感』の波紋」『文学』(第54号、1986年8月)。
- 35) 無記名「青年と自殺」『児童研究』(第6巻第7号、1903年7月、「論説」欄)。
- 36) 無記名「厭世的傾向」『児童研究』(第6巻第7号、1903年7月、「雑録」欄)。
- 37) 日露戦争後に「煩悶青年」が再び世を賑わすようになると、『児童研究』の「論説」欄は彼等を病人として扱っている。「吾人は、自殺などを行ったもの、或は行はうとした者に就いて、一層精細に生物学的生理学的心理学的の検査を行ひ、特に其の遺伝及び現在の神経状態を調べる必要があるとおもふ……之を救ふ道は医者より外にない。宗教家も教育家も余計な責任を背負ひ込んで、あまり心配せぬがよからう」(無記名「青年の煩悶及び厭世」『児童研究』第9巻第6号、1906年6月)。
- 38) E. H. キンモンズ『立身出世の社会史』(玉川大学出版部、1995年)109頁。
- 39) 和崎光太郎「青年期自己形成概念としての〈修養〉論の誕生」教育史学会機関誌編集委員会編『日本の教育史学』(第50集、2007年)。
- 40) 和崎光太郎前掲「世紀転換期における〈修養〉の変容」。
- 41) 松村介石『修養録』(警醒社、1899年)。同書の内容及び歴史的意義については、和崎光太郎前掲「青年期自己形成概念としての〈修養〉論の誕生」で詳しく述べている。
- 42) 高島平三郎前掲「青年期及び其の教育」。
- 43) 佐藤達哉・溝口元編『通史 日本の心理学』(北大路書房、1997年)68頁。
- 44) 人類進化の歴史を人はその一生において経験するという説。ホールの反復説については、杉本政繁「G. S. ホールの『青年期』における motor education 論」日本体育学会編『体育学研究』(第28巻第2号、1983年)及び菅野文彦「G. S. ホールの教育思想の成立—自然科学の進展と反復説」筑波大学編『西洋教育史研究』(第17号、1988年)を参照。
- 45) 無記名「児童と野蛮人との類似点」『児童研究』(第1巻第2号、1898年12月)など。
- 46) ホールの質問紙法については、松岡信義「児童研究運動における「科学」観の検討(1)」美作女子大学短期大学部編『美作女子大学短期大学部紀要』(30号、1985年)を参照。
- 47) 無記名「青年時代に関する研究」『児童研究』(第1巻第1号、1898年11月、「雑録」欄)など。
- 48) 佐藤達哉・溝口元編前掲『通史 日本の心理学』64-107頁。
- 49) 無記名「学生気風の一変」『教育時論』(第430号、1897年3月)など。
- 50) 当初は男子学生がターゲットとされたが、1900年代に入ると女子学生の「醜態」がよりセンセーショナルに報じられるようになった。詳しくは、小山静子「メディアによる女学生批判と高等女学校教育——女性が教育を受けることはどのようにとらえられたか——」辻本雅史編『知の伝達メディアの歴史研究—教育史像の再構築』(思文閣出版、2010年)214-235頁を参照されたい。
- 51) 「学生に関する風紀問題」『児童研究』(第2巻第8号、1900年4月、「論説」欄)。
- 52) 学校騒動については、寺崎昌男「明治学校史の一断面——学校紛擾をめぐって」教育史学会機関誌編集委員会編『日本の教育史学』(第13集、1970年)、佐藤秀夫『教育の文化史2 学校の文化』(阿吽社、2005年)229-276頁を参照。
- 53) 無記名「学校騒動の原因を論ず」『児童研究』(第5巻第2号、1902年4月、「論説」欄)。
- 54) 「師道」論から教師〈修養〉論への変化については、和崎光太郎前掲「世紀転換期における〈修養〉の変容」を参照されたい。
- 55) 齊藤太郎「明治期における学生・生徒の問題行動の理解様式について(1)」東京農薬大学編『一般教育学術集報』(第10巻第10号、1974年)、齊藤太郎「明治中期における精神障害理解の二様相」筑波大学教育学系編『筑波大学教育学系論集』(第1巻、1977年)。
- 56) 無記名「学生と神経衰弱症」『児童研究』(第3巻第5号、1900年11月、「雑録」欄)、無記名「児童の自殺に就いて」『児童研究』(同上)。
- 57) 一衛生家「無題」『児童研究』(第3巻第8号、1901年2月、「雑録」欄の投書)。

The Formation of the Concept of “Adolescence” in Modern Japan —— from the ambitious young man to young man as a student ——

Kotaro WASAKI

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto, 606-8501 Japan

The purpose of this paper is to explore how the concept of “adolescence” was constructed in modern Japan, and discuss how the meaning of “young man” had gone through a change by the appearance of “adolescence”. Specifically, I will analyze an educational journal “Jido Kenkyu” in which the concept “adolescence” had first appeared in Japan.

The conclusion is as follow. The concept of “adolescence” in modern Japan was established in the editorial article by Matsumoto Kojiro published in 1900, and in the academical article by Takashima Heizaburo published in 1902. In these articles, “young man” meant neither a new generation nor political group anymore. Reinterpreted as a developmental stage of “adolescence”, “young man” was considered to be a sick being that had to be dealt with in order to adapt him to school life.